

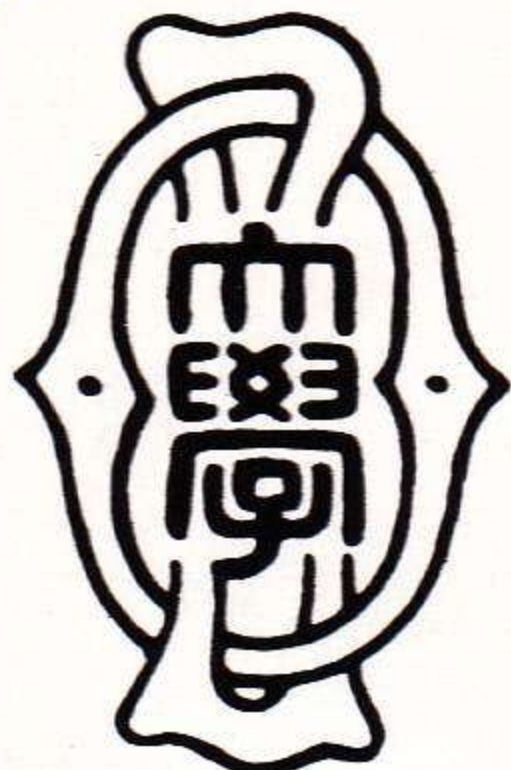
Joint Concert in Osaka

❁ 三大学交歓演奏会 ❁

東京外国語大学グリークラブ

大阪外国語大学グリークラブ

広島大学グリークラブ



1978年 10月 20日 (金)

中之島 中央公会堂大ホール

大阪外国語大学学生歌

Gaigo will shine tonight
Gaigo will shine !
Gaigo will shine tonight
All down the line !
Gaigo will shine tonight
Don't they look fine !
When the sun goes down
and the moon comes up
Gaigo will shine,
Gaigo will shine !

Varsity ! Varsity !
Osaka Gaikokugo Daigaku !
Praise to thee we sing,
Praise to thee our alma mater
U Rah Rah !
Osaka Gai-dai !

東京外国語大学歌

天地のひらく あけぼのに
プロメテウスの 炬のごとく
いざや掲げむ 燃ゆる理想を
大いなる視野 ひらけゆく
ああ 東京外語大
われらの行手 永久に輝く

長き歴史を いしずえに
日々新たなる 力もて
承けつぎ築く 文化の堂宇
東亜の声を伝えつつ
ああ 東京外語大
われらの誇 さらに加えむ

若き精神を 相結び
言葉の園に わけ入りて
探り賞でなむ 真理の花を
世界の同胞 一にして
ああ 東京外語大
われらの歩み 平和に満つる

広島大学歌

光あり

古き歴史は七筋に

わかれとはに伝へけり

ああわれら

移らふ時にかはらざる

善きをこそ努めん集ひなり

光あり

遠き山なみ輝きて

新たなる日はひらけたり

ああわれら

はてしなき空にかたちなす

真をぞきわめん望みなり

ご あ い さ つ

東京外国語大学・大阪外国語大学・広島大学のグリークラブによる、念願の三大学交歓演奏会が開催されますこと、まことに喜ばしく思います。この演奏会を機に三大学の各グリークラブが今後ますます充実・発展し、また三者の友誼を深めていただきたいと思います。

さて、音楽をはじめとする芸術が、今日の社会では教養として万人に欠かせざるものであるにもかかわらず、芸術や美的感覚に対する大学教育の役割については、残念ながら我が国では、まだ真剣な問題として討論される段階に至っていません。芸術系大学のような特定の大学だけでなく、一般の大学においても、芸術の教養が、平和にして豊かな心の人間を築くために、いかに強く要求されているかを、日頃痛感しております。

今回の三大学交歓演奏会が、このような問題を考える良き機会を我々大学の教職員及び学生諸君に与えて下さったことを感謝しつつ、この演奏会の成功を心から期待します。

大阪外国語大学長 伊 地 智 善 継

日脚も短くなり秋の深まりが一層の身にしみてまいりましたが、本日はお忙しい中をお越し下さいまして誠にありがとうございます。

今宵、広島大学と東京外国語大学のグリークラブを迎え、文歓演奏会を開催できますことは、私共にとってこの上もない喜びです。これも皆様方の暖かい御支援の賜物と深く感謝いたします。

歌バカを自負する我々大阪外大グリー、それに負けず劣らず歌好きの集まりである広島大学グリーと東京外大のグリー-----それぞれの奏でるハーモニー、そして心の和音が、皆様に少しでも届けば幸いです。

どうか最後までごゆっくり御鑑賞下さい。その上で率直な御批評、御鞭撻を賜わります様お願い申し上げます。

最後になりましたが、演奏会開催に際して、御尽力下さいました各方面の方々に、紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

大阪外国語大学グリークラブ部員一同

古典イタリア歌曲

Amarilli, mia bella

「アマリリ 麗し」

Gia il sole dal Gange

「太陽は昇りぬ ガンジスより」

O del mio dolce ardor

「おゝ やさしい恋人よ」

Piacer d'amor

「愛のよろこび」

編	曲	福	永	陽一郎
指	揮	堀	田	光 行
ピアノ伴奏		新	谷	昭 一

最初のステージは大阪外国語大学グリーによる古典イタリア歌曲です。

16世紀から18世紀の作曲家の手になるこれらの音楽には、後年のイタリアオペラほどに感情と密着した旋律の流露は見られないとしても、その典雅な形式美と甘美な旋律には、確かに、地中海の輝かしい太陽を浴びて生きる人々の明るい人間讃歌を認めてよいでしょう。人間讃歌とは即ち現世への明晰な肯定の謂であります。明るい太陽の下で生き、太陽の美質を悉く吸収した人々は、人生の一回性という認識を得ても、暗い憂愁や残薄な諦観には陥ることなく、むしろ一層明るい太陽の光で人生を型づくろうとしました。沈潜することのみが人生ではありません。イタリアの音楽はそんな陽の翳りから生まれる哲学には目を背け、美しい感情を美しい型にのせることによって人生を表わそうとしました。美なるものこそ最上であるとの極て潔癖な芸術信条がそこに見られるのです。

クラブ紹介

シンセサイザーという電子楽器がある。何やら電氣的からくりを用いてあらゆる種類の楽器の音色が出せる代物という。たとえばバイオリンの音がほしければ、バイオリンの音色が持つ波形と同じその音を作り出すという。ところがシンセサイザーが作り出したバイオリンの音なるものを人間が耳で聴くと、その音色はバイオリンのものとは、はっきり別物として聴こえるようだ。オシロスコープ等の機械で確かめると間違いなく同一の音であるにもかかわらず、である。人間の耳とはそれ程すばらしく、また不可思議なものなのだ。

我々大阪外語グリーは、正直なところ楽譜に書かれてあることを再現するテクニックにたけている方だとはいえない。もっとうまいグリーは沢山ある。しかし我々は、今年で創部以来52年を数え、合唱界の大御所清水脩氏をはじめ数多くの先輩方を世に送り出した大阪でも指折りの名門グリーだという自負を忘れてはいない。入部した時には音楽に関してズブの素人という部員がほとんどであり、練習環境にも恵まれぬ我々だが、演奏を聴いて下さるのは機械などではなく、人間の耳を持ったお客様であることに活路を見出したい。音楽は再現芸術だが、単に音符を音として正確にコピーするだけなら、人間はシンセサイザーに勝てない。演奏するのも人間なら聴くのも人間、そこには機械にまねのできぬものを生み出す余地があるに違いない——そう信じてそれに賭ける我々である。

組曲 雪と花火

「片恋」

「彼岸花」

「芥子の葉」

「花火」

作詞 北原白秋

作曲 多田武彦

指揮 刀禰泰史

この組曲は多田武彦氏の初期の作品で、昭和32年に同志社大学グリークラブの委嘱作品として作曲されたものです。歌詞は北原白秋の抒情詩集“雪と花火”から選ばれています。当時大阪から東京に居を移したばかりの多田氏は、この詩集の“東京景物詩”という副題に注目し、詩集から四つの詩を選んで、東京の、特に下町の風情を伝える組曲として作曲したものです。この組曲は単に隅田川を中心とした下町の風物を描写するのではなく、むしろそこに住む人々の心模様、換言するなら、“下町っ子の粹な恋心”とでも申せましょうか、「片恋」に始まって最後の「花火」まで、全曲にわたってこの心情が形をかえては表現されているのです。特に終曲「花火」はスケールも大きく、両国の川開きの様子が目に浮んでくるような、すばらしい構成をしています。多田氏は終曲を作曲する際、藍色を常に念頭に置かれたそうですが、我々も、精々桃色の「花火」にならぬ様にせねば、と思います。本来、余り大人数で歌う曲ではないとはいえ、我々の人数でどれだけの事ができるか危惧も多いのですが、“両国花火復活”の便りにのせて、東京の下町の味が僅かでもお伝えできれば幸いです。

クラブ紹介

私達東外大グリークラブを自己分析しますと、現状には決して満足していないにも拘わらず、変革を好まず保守的傾向が強く向上心が小さいクラブといわざるを得ませんでした。

まるで船長のいない船で、船員たちが皆思い思いに櫓を漕ぎ始め、あげくには櫓を捨て陸にあがる者さえ出てくる始末……それが私達の姿だったのです。

しかし、そんな泥沼からも少しずつ這い上り、ついに「歌は下手でも、我々なりに一生懸命やっていこう！」という結論を得たのでした。ちょうどその頃です。大阪外大グリーの方から、今回の交歓演奏会の話をもちかけられたのは。この知らせは私達の心を一層強く結びつけました。

7月末の河口湖畔での合宿は、予想以上に充実し、今回のジョイント・コンサート、さらに12月の第13回定期演奏会に向けて、皆頑張っています。まさに「雨降って地固まる」の心境です。

皆さん、私達は技術的には未熟ですし、人数も10人足らず。でもみんな“歌を愛している”ということで結ばれているのです。

月は美しい。今の私達は月にはなれません。しかし太陽の光を借りて輝く月になれぬとも、自らの心で美しく光り輝く10匹のスッポンでありたいと思います。

黙 示

作 詞	木 原 孝 一
作 曲	清 水 脩
指 揮	渡 辺 正 樹

これは戦争をテーマとした清水脩氏の作品です。

清水脩氏の作品の中には、ときに難解なハーモニーの展開をもったものがありますが、この「黙示」もその代表的な例です。曲全体を通して、調が絶えず変化しますし、移動度に慣れた者にとっては、音を取るだけでも一苦勞です。

しかし、この耳慣れない音程・和音が、曲調にある異様な雰囲気を持たせることによって、歌の中に、ある種の説得力とでも申しましょうか、非常に大きな力の固まりを与えているような気がするのです。

戦争の残酷さと暗さ、それに対する何千、何万の人間の怒りやうめきの巨大ではあるが言いあらわしようのないエネルギー——そういったものが感じられます。

私たち70余人の力が、それらをどれだけ表現できるか、このステージで挑戦してみたいと思います。

クラブ紹介

皆さんこんばんは。広島大学グリークラブです。と申しましても皆さんは「ハテ、ドンナヤツカイナ？」と思われるでしょうか。ではやはり、普通の自己紹介をいたしますね。

私たちは、近年ふたたびクラブとしての量、たぶん質も、上昇傾向にあり、現在部員は74名です。春は地元の合唱団や音楽サークルとの合同演奏会活動など、冬には今年で18回目をむかえます定期演奏会、そしてその間の秋には日替りランチ、すなわち、その年その年独自の活動を行なっています。昨年は合唱コンクールに参加しました。そして全国大会において、多くのすぐれた合唱団の演奏に接することもできました。大阪などに比べると文化的刺激のすくない地方にいる私たちにとっては、ジョイント・コンサートやコンクールへの参加は、自らに新鮮な血液をおくりこむ最良のチャンスであると考えます。

そして今宵、大阪と東京の2つの語学系大学と交歓をもてることは、すばらしい収穫です。そして演奏会がひけたとき、「来テヨカッタナ、男声合唱ハオモロイナ」と感じて下さったり、「ヘタクソメ、モット練習ヲ積ミタマエ。」とお叱り下さるなら、どんなにうれしい帰途につけることでしょう。

Sea Shanty

Whup! Jamboree

A- Roving

Shenandoah

Away to Rio!

Spanish Ladies

指揮 堀田光行

歌は生活の苦しみを和らげ、生活の喜びを増すものです。人間が生き働くところに常に歌は生まれてきました。

水夫たちの労働は Sea Shanty を生み出しました。彼らは、帆を上げ錨を上げる肉体の酷使を知り、夜の甲板で久しく会わぬ恋人を想う胸の痛みを知っていました。故郷を想い家族を想う感傷を知っていたし、あるいは汗を流し労働することの尽きぬ喜びをも知っていました。そんな彼らの生活にこそ歌はふさわしく、彼らは心より湧く歌をつくり歌い継ぎました。人生の断定の種々の想いの散りばめられた、ある時は哀しく、ある時は楽しい歌を。

今宵の合同ステージに、これら海の男たちの色彩豊かな交響詩を、勇壮に歌いあげることが、この新しいジョイントコンサートの出発を飾るのにふさわしいものと思います。

各合唱団の今後の演奏会予定

● 広島大学グリークラブ

12月15日(金) 第18回定期演奏会 於 広島市公会堂

54年6月 広島学生合唱連盟合同演奏会

6月 第10回男声合唱の夕べ(広島メンネルコール・崇徳高校グリーと共に)

● 東京外国語大学グリークラブ

12月13日(水) 第13回定期演奏会

54年1月13日(土) 跡見短大フラウエンコール定期演奏会ゲスト出演

● 大阪外国語大学グリークラブ

11月26日(日)～12月3日(日) 外大祭出演

12月9日(土) 第22回定期演奏会 於 東大阪市民会館

